



## 『Infectious Diseases and Pathology of Reptiles』

Jacobson, E.R. 編著

CRC Press 社, NY, USA, 2007 年刊, 715 頁

篠田理恵, 浅川満彦 (酪農学園大学獣医学部)

本書について、現在、酪農学園大学野生動物医学センター WAMC で爬虫類医学について研究している篠田と、現在、勉強中の浅川とで紹介した。前半の概要を篠田、後半の寄生虫学関連を浅川が評した。

### 概 要

近年、エキゾチック・アニマルが多く飼育されるようになり、このような動物を診療する動物病院が増えてきている。しかし、爬虫類が哺乳類とまったく異なる生態あるいは生理機能を有しているため、受け入れられる病院はとて少ないのが現状である。また、爬虫類医学領域の専門書に関しても、哺乳類や鳥類と比べ、非常に少ない。しかし、本書は、このように数少ない爬虫類医学の専門書の中で、診療時にとても有益であると考えられる生態、解剖、組織などが中心に記載され、これから爬虫類の診療を目指す人にも、すでに開業医として爬虫類の診療に携わっている人にも大変参考になるテキストであると思う。本書は刊行されたばかり

りで、残念ながらまだ翻訳版は出ていない。章構成は以下の通りである。

第 1 章	生物学, 解剖学, 組織学の概要
第 2 章	免疫学
第 3 章	血液学
第 4 章	剖検手技
第 5 章	感染性病原体に対する宿主応答と各組織部位に存在する病原体の同定
第 6 章	電子顕微鏡による病原体の証明
第 7 章	分子診断
第 8 章	血清診断
第 9 章	ウイルス性疾患
第 10 章	細菌性疾患
第 11 章	真菌性疾患
第 12 章	寄生虫性疾患
第 13 章	病原体の分離

本書の良さは写真の豊富さに尽きる。それらの写真は鮮明で魅力的であり、写真はそれぞれの章末(引用文献表の後)に一括掲載されている。したがって、前半に書かれている本文を見ながら、章末の写真集を見て理解する形式である。対象とされる種は、ペットとして多く飼育されている代表的なヒョウモントカゲモドキ、ボア、グリーンイグアナ、ミシシippアカミミガメなどが多く載っていることも実用的であると思う。

本書で私(篠田)が一番読んで欲しいと思った章は第9章以降のウイルス、細菌、真菌および寄生虫の章である。大学で学ぶこれらの学問は主に犬、猫、家畜に焦点をあてたもので、爬虫類までを中心の対象としてはいない。そのため、ある種の家畜寄生の病原体が爬虫類にも感染するというのを初めて知り得、既存の獣医伝染病学に対しても興味を持てるようになった。記載も爬虫類各目(order)における症状、好発部位などが細かつ具体的に記され、かつ病理組織像や虫体像なども添えてありとても分かりやすい。

### 寄生虫学関連

前半で絶賛を得た本書である。しかし、これまで大枚をはたいて整備した WAMC 所蔵の類書と、本書はどのような点で差別化されるのか。このままでは、まことに茫漠たるものである。本書は篠田の強いリクエストで公費購入された(卒論生1名に割り当てられた年間演習予算10万円で、その約20%を占有)。その決定を下した張本人(浅川)としては知る義務がある。とはいっ

ても、理解できるのは寄生虫症（とりわけ、蠕虫と節足動物で、原虫はちょっと…）だけ。針の穴からすべてを見渡すようだが、このパートだけで本書の真価を考察しよう。

本書は12名の執筆陣（多くはフロリダ大学）で構成されているが、editorのJacobson氏自らが第12章を担当している。彼もフロリダ大学（それも伴侶動物医療の部門）に勤務するので、お土地柄の野生個体と思われる症例が豊富なことが特に目をひいた。まず、ウミガメ寄生性フジツボ。すべてが病的個体で撮影された写真で、もちろん、フジツボ寄生が死因の主因なのか、それとも二次的なものなのかは解らない。が、「ただ、ちょっと、くっついているだけです。絶対に迷惑はかけませんから」

というレベルのものではない。今、個人的にフジツボは興味を持っており（浅川, 2006）、また、共同研究をしている千葉大学・理・地域科学の林 亮太さんがウミガメ寄生性のフジツボ3種のニッチについて論考した論文も出たばかりで（Hayashi and Tsuji, 2008）、おびただしいフジツボの寄生状況を示す写真には釘付けになった。と、関心しつつ本書表紙を見ると、本書副題が「カラーアトラスとテキスト」とあり、「ああ、さもありなん」である。

フジツボの前頁には、淡水および海水性のヒル症の写真があり、これがまたすごい！眼球や頸部（あるいは口腔）寄生の成虫は、まあ、想像できるが、ウミガメ四肢のフジツボの間に産み付けられたヒル（*Ozobranchus* 属）卵塊はまさに衝撃的である。さらに、内視鏡付鉗子で舌虫（*Armillifer armillatus*）がヘビの喉頭から釣り出された瞬間の写真は、この寄生虫症に悩まされている動物園臨床獣医師（彼らが集まる場では、案外、そのような方が多いことに驚かされる）には有益な示唆を与えるであろう。そして、この奇妙な寄生虫のHE染色組織像やSEM像、虫卵、寄生病変のマクロ像などすべてが有益な情報となる。

環形・節足が続いたが、蠕虫はどうだろう。光学顕微鏡レベルの蠕虫類自体の写真は（その掲載時の配置も含め）、概して、到底満足のいくものではない。著者が形態学者ではないとしても、プロの寄生虫学者に点検してもらっても良いはずだと思った。他の写真が優れているだけに、実に惜しい。だが、マクロ病理の写真のすべてには圧倒された。特に、ワニの *Paratrachosoma* 属線虫やカメの *Spirorchis* 属吸虫などの寄生病変などは初めて見た。

2008年度から、浅川の勤務先では寄生性原虫学は別の専任教員が配属され、我々、旧来の寄生虫学教育の担当者は、その責務から解放された。だから、安心して原虫の項は見ないでおいたが、カメの *Caryospora* 属スポロゾイトが描く幾何

学的な写真を見た途端、フリーズした。その配置は美の極致である。おそらく、このような写真を授業で使えば、学生さんは目を覚ましたのであろうに（前述のように、そのような機会はないだろうがね）。実用的なものとして、胃生検組織のギムザ染色によるクリプトスポリジウム症確定診断像、絨毛虫 *Balantidium* と *Nyctotherus* の比較、オーシストの微分干渉顕微鏡写真などが掲げられた。繰り返すが、この章の著者は形態学者ではない。しかし、優れた臨床家であること（少なくとも、臨床家の立場になつての提示が巧みであること）は間違いなし。結論。購入して損は無かったので、学生諸君は、きちんと読んでモトを取ってくれ。以上。

## 文献

1. 浅川満彦. 2006. ジラ類に住み着く「ふじつぼ」と「しらみ」はどのような悪さをするのだろうか. 飼水産無脊椎動物研究所刊 うみうし通信 (53) : 10-12.
2. Hayashi R, Tsuji K. 2008. Spatial distribution of turtle barnacles on the green sea turtle, *Chelonia mydas*. *Ecol Res* 23: 121-125.